

シリーズ[§]『青松』を読む[§]①

手づくりで始まる¹⁾

——国立療養所大島青松園関係史料の保存と公開と活用に向けて——

阿 部 安 成

2015/4/5 瀬戸内海に霧

『青松』の始まりへ 香川県に設けられた、癩そしてハンセン病をめぐる療養所は瀬戸内海の島にある。そこで編集、発行されていた逐次刊行物『藻汐草』の解説ですでにふれたとおり²⁾、2015年12月の現時において刊行されている隔月刊の逐次刊行物『青松』（編集青松編集委員会、発行者国立療養所大島青松園協和会、活版印刷）は、その創刊時とはいうと「廃紙への自筆原稿綴じ月一冊を発行」とのようすだった³⁾。『青松』の刊行は、恵まれない物資と、しかし抑えがたい書くこと記録することへの欲求とによって、1944年と

1) 本稿は2015年度日本学術振興会科学研究費助成事業基盤研究C「20世紀日本の感染症管理と生をめぐる文化研究」(JSPS 科研費 26370788、研究代表者石居人也)、2015年度滋賀大学経済学部学術後援基金研究テーマ「歴史資料の保存と公開と活用の実践論」、2015年度滋賀大学環境総合研究センタープロジェクト研究「療養所環境を交ぜる」の成果の1つである。

2) 阿部安成「総合する企て—『藻汐草』を解説する」阿部安成監修、解説『藻汐草』リプリント国立療養所大島青松園関係史料シリーズ2、近現代資料刊行会、2014年。

3) 『閉ざされた島の昭和史—国立療養所大島青松園入園者自治会五十年史』大島青松園入園者自治会(協和会)、1981年、掲載の「年表 自治会・青松園関係」。

いう時世に始まったのである。「廃紙への自筆原稿綴じ」という形態の1部かぎりの刊行物は、おそらくほかの療養所にはほとんど残っていないだろう⁴⁾。印刷されてはいないのだから厳密には刊行物とはいえないこの『青松』は、癩そしてハンセン病をめぐる療養所に生きた療養者たちの、稀有な生の記録なのである。1部だけの手書き手づくりであること、1945年をはさむその前後に作成されたこと、これらの点において『青松』はめずらしい記録となった。

療養所の^{まれもの}稀物といえるこの『青松』はしかし、これまで、充分にその希少価値が活かされてこなかった。さきにみた大島青松園の自治会活動50年をふりかえる史誌において、戦時期のようすを伝えるほかにない記録でありながら、この『青松』からの明瞭な引用はおこなわれていないのだった。ただし同書の「文芸活動の歷程」と題されたページの「藻汐草」発行と外部指向の胎動」との見出しのもとでは、『青松』についてのまとまった文章がみえる。それをここに記そう。

同人誌「青松」発刊（19年11月）も前記〔「外からの刺激で、「職員と患者」の文芸集會が始まった」を指すか——引用者による。以下同〕の一環で、藻汐草廃刊で委縮沈黙すべきでなく、形だけのものでも「みんなで雑誌をもっては？」との示唆を得、仲間たちで発足したもの。敗戦色兆さず貧窮・荒涼下に、せめて惻隱の情感だけでも綴り止めておこう、とのひたむきな思いと、ひもじさに詩情のカケラでも置いて、耐えよう、との素朴な念願でもあった——廃紙ウラや薬包紙に、てんでに書きこまれた生原稿の荒綴じは、風流というか、珍妙無類な創刊だった。二年目からは紙型を揃え、やがて謄写刷り原稿用紙に統一したが、なま原稿綴じの一部限定は変わらず、主として「園内回覧」

⁴⁾ 国立療養所邑久光明園（岡山県瀬戸内市。以下療養所名は、邑久光明園、と略記する）でつくられた『楓』も手書き手づくりの「綜合雑誌」だった。ただし同誌は「廃紙」ではなく原稿用紙などを用いていた。現存する同誌は1947年3月15日「発行」の第1巻第2号2・3月合併号、第1巻第3号4・5月号（1947年6月10日）、第1巻第4号6・7月号（1947年8月29日）、第1巻第5号8・9月号（1947年10月）第1巻第6号10・11月号（1947年12月5日）、第2巻第1号新年号（1948年1月30日。「二部発行」）、第2巻第3号2・3月号（1948年4月25日）で、その複写製本版を国立ハンセン病資料館図書室で閲覧した（その第2巻第4号が謄写版刷りとなる）。手書き手づくりの『楓』については、阿部安成「楓の手づくり—国立療養所邑久光明園における第二次世界大戦後初期の文芸」（滋賀大学経済学部 Working Paper Series、2016年1月発行予定）を参照。

に限られた。／空き腹ながらも、意気軒昂というか、若さと意欲が溢れていたし、戦後の「療園再建」の涙ぐましい状況等も活写されており、貴重な史実でもある。23 年末の第 46 号まで続き、活版刷り発行へ移り、自治会誌へと発展する。

と現物をみたのかどうかははっきりとしない曖昧な記述となっはいる。五十年史の刊行時には自治会において同誌の所在がわからなかったのかもしれない。

それから 23 年後の 2004 年に通巻第 600 号をむかえた『青松』（第 61 巻第 7 号、2004 年 9 月）は、^{おもて}表紙見返しの口絵に「創刊当時の「青松」」のキャプションをつけた写真 2 葉を掲載し、「第一号から第三号までの手綴じの「青松」と、第一号の目次と土谷勉編集長の巻頭言。／表紙はセメント袋等、原稿はチラシや薬袋の裏に各自が書いていた」との説明をくわえていた。このときは、『青松』第 1 号から第 3 号までの現物を確認したのだろうか⁵⁾。

『青松』誌面をさかのぼってみると、通巻第 500 号（第 51 巻第 7 号、1994 年 8 月）のやはり表紙裏の口絵に 2 葉の写真と「昔の「青松」と編集室／手綴じの“青松”第 1 号～第 4 号。表紙はセメント袋等、原稿は薬袋の裏等へ書いた」のキャプション。通巻第 400 号（第 41 巻第 6 号、1984 年 8 月）では、「表紙題字と揮毫者ならびにその年代」と題したページが生まれ、そこに「<題字説明>創刊号以降、第四十四号までの園内版、昭和十九年十一月号から二十三年九月号まで」のキャプションと、9 冊の『青松』を撮った写真がおかれた。通巻第 300 号（第 31 巻第 6 号、1974 年 7 月）では、自治会会長神崎正男執筆の稿「「青松」の役割と意義」の挿絵に写真（これが通巻第 400 号にも転載）が用いられ、そこに「創刊当時の青松（園内版）」とのキャプション。通巻第 200 号（第 21 巻第 6 号、1964 年 7 月）には、記念の記事や文章はない（このときの編集兼発行者は難波良三、「編集後記」の署名は曾我野）。通巻第 100 号（第 12 巻第 3 号、1955 年 3 月）は、2 ページにわたって 4 葉の口絵写真を載せ、そのうちの 3 葉が「園内版当時の『青松』」の「其の一」「其の二」「其の三」でかなりの数の現物が写っている。「其の一」が通巻第 300 号にも転載。あさの・

5) わたしが初めて同誌を閲覧したときには、この第 1 号といっしょにいわれる茶封筒があり、その表書きは「青松／創刊第一号／第二号／第三号」の手書きとなっていた。

しげるが『『青松』の生い立ちとうつりかわり』を同号に寄稿している。

こうしてみると 1981 年刊行の五十年史にはその写真が掲載されなかったものの、節目のときには創刊時のようすが顧みられ、そのときどきに手づくり『青松』の写真が撮られ、2004 年の時点でも現物をみていたと推察できる。

この療養所の稀物である「生ま原稿の荒綴じ」である『青松』になにが記録され、それをとおして療養所のようにと、そこに生きた療養者の生のなにがわかるのかを、本稿を始まりとするこのシリーズでみてゆくとしよう⁶⁾。

第 1 号 厚手の紙を用いて表紙とし、そこに貼られた原稿用紙に「青松／第一号」と筆書きされている。左から右への横書きとなっている題字と号数の表記が目にあたらしい。その脇に縦書きで「昭和十九年拾一月卅日発行」とある。この表紙にはまた、「回覧」の文字がスタンプで押され、そのまわりに、「野島」（手書き）、「林」「青山荘主人」（手書き、同筆）、「高橋」（彫印）の押印やサインがある（1つの印影が判読不能）。

表表紙の裏には、「救癩事業に御内帑金／重ねて継続賜金の御仁慈」の見出しがみえる新聞記事の切り抜きが貼られ（紙名、発行年月日は不詳）、原稿用紙に記された「目次」が貼ってある。

目次／巻頭言／神武の精神 土谷勉／団栗の叫び 浅野繁／島庵独語 穂波生／随筆
笠居誠一／日本の文章道 保田与重郎／歌集「松籟」「星霜」の出版を祝して 藻汐短歌
会同人／俳句 喜田正秋／あとがき

つづく土谷勉による「巻頭言」は、「療養のあけくれが即ち吾々の戦である」の一文で稿を起し、「吾々はこのきびしい戦の最中であつて愈々文の心をみがきたい」との決意をあらわしている。「これは一見矛盾するやうであるが決して矛盾しない。文をたしなむ心が即ち必勝であり、大和一致であり、戦意の昂揚といひ、適格な判断力といひ一にかゝつて文の心である。文を忘れたトゲトゲしい心では到底この大みいくさを勝ち抜くことはできな

⁶⁾ 手書き手づくり『青松』閲覧の経緯とその残存号と記事索引を、阿部安成ほか「後続の意志—国立療養所大島青松園での逐次刊行物のその後」滋賀大学経済学部 Working Paper Series No.116、2009 年 9 月、に記した。同稿と本稿の記述に重複するところがある。

いのだ」と、彼はうったえていた。のちに2冊の著書と1冊の編著を刊行し⁷⁾、『青松』にも多くの稿を寄せた文筆のひと土谷ならでは、戦時への決意である。

土谷執筆の稿「神武の精神」はまず、「文と武は本来別々でない。渾然たる一体である」とうたえる。ついで、「これが神武の精神であり。吾が肇国の伝統である」と説く。「吾が」国の始まりにまでさかのぼって、「文と武」が「一体」であるとの「精神」や「伝統」をさだめて、「この事実をしつかり認識しないと、きびしい今の時局下、文学を理解することは出来ない」との主張がみえる。

「今の時局下」が「きびしい」とは、だれにとって、どのように、そういい得るのか、また、「文学を理解することは出来ない」とは、これまただれにとってそうなのか。この『青松』第1号がつくられた1944年11月の戦時下において、その時局はだれにとってもすべてにおいて「きびし」かったといえようが、これは文事^{ぶんじ}にかかわるもの、とくに隔離施設としての療養所に生きながら文事をもつ療養者にとってその「きびし」さへの自覚があらわされ、そうしたときにみずからの「文学」が療養所の外に生きる人びとに「理解」されないとの、これまた「きびしい」事情を自覚しているとの謂なのである。なぜそう記さなくてはならないのか――。

それは「今の時局」が戦時にほかならず、それは「武」が必要とされ、それを駆使し得ることが尊ばれ讃えられる時世であり、しかし、いま、「武」がわが身に備わらず、それを發揮できずにいながら「文」に親しもうとするとき、そうした療養者が綴る「文学」が外部のものたちには「理解」されないとの絶望に泥むからなのである。

だからそうした時局においてなお「文学」を記そうとするのであれば、「吾が肇国の伝統」と「神武の精神」にのっとり、そのあらわれとして「文と武」とは「渾然たる一体である」とうたえなければならなかったのである。

ただし、ここで指摘しておく、自分たちの「文学」を理解してほしいと願っていた、その当の相手であるおそらく療養所の外に暮らす人びとに、この土谷の稿が載る、いや、

⁷⁾ 土谷勉『癪院創世』木村武彦、1949年、同『昔の癪のこぼればなし』癪予防協会、厚生時報社、1950年、同編、林文雄著『林文雄句集 天の墓標』新教出版社、1978年。

より適切にいえば、その稿が綴じられた『青松』は、彼ら彼女たちに読まれるどころか手にされることすら、けしてなかった。『青松』はそうした療養所の内外をつなぐ媒体とはならなかったのである。そうした不機能をふまえれば、『青松』もそこに綴じられた稿に記された文字も、荒井裕樹の聡い耳によって聞きとられた「虚空への絶叫」または「絶叫する沈黙」⁸⁾とおなじ声だったのだ。

さらにいうと、療養所内外の媒体とならなかっただけでなく、たった 1 冊しかつくられなかった『青松』は、療養所内においてもごくかぎられた人びとのあいだでしか読まれなかったのだから、執筆者たちの絶叫は同人の眼をとおしたごく狭い空間にしか響かなかった。そうすると、彼らが抱いたみずからの「文学」が理解されないだろうという危惧は、療養所内の自分たち以外の非同人たちをもみすえたうえでの絶望となったのかもしれない。

では土谷は、「神武の精神」をどう活用しようというのか——。文武一体は、たとえば、「前線に於ける将兵が、死闘の暇に短歌や俳句に親しむ姿」をおもいうかべられるし、木村重成（豊臣秀頼に仕えた武将）の故事を例としてあげられるといい、そうした「日本武士道」が「頭蓋骨を弄んで恥ぢぬ米兵と本質的な相違」となり、この彼我の違いが「今回の戦争を聖戦と言はれる所以」ともしたと説く。彼なりにかたちづくった「吾が肇国の伝統」「日本武士道」「聖戦」、そして「神武の精神」なるものをとおして、みずからの「文」を意義あるものとしようと彼は身構えたのである。

療養所においてもやはり「時局は正にきびしい。日毎夜毎ひしひしと身に迫るものがある。戦ひとは戦線ばかりでなく、吾々の日毎が戦ひである。不自由をしのぎ、艱苦に克つのが即ち吾々の立派な戦争である。戦力とは銃を執る兵隊の力量ばかりでなく、国民全体の戦ふ力の総和である。総力戦である」と、「総力戦」というこれまでとは異なる現時の戦争の形容をつかって、そこにいう「総」にわが身どもを入れこもうとしている。ここでもまた故事なるものが参照され、「神武天皇の御東征に際し、女まで参加した事実を思へば、由来、戦争はいつの時代にあつても総力戦であり、国民全部の戦ひであつたことがわかる」というわけだ。そうであれば、「従つて国民皆兵といふ言葉も悠久三千年の歴史を貫く厳たる事

⁸⁾ 荒井裕樹『隔離の文学—ハンセン病療養所の自己表現史』書肆アルス、2011 年。

実であつて、今の吾々の明かな実践でなければならぬ」と方向がさだまれば、「病むとは謂へ、吾々も御楯である。時と処さへ得られるならば、いのちの限り戦ひ抜く覚悟もとよりのこと、武士道とは兵隊の専有でなく、日本人の道である」（傍点は原文）といい得ることとなる。

「古今の美しく勇ましい日本武士が、そのまゝ吾々の憧憬であり、商魂といはれ、農魂といはれ、みな一様に日本武士道のこゝに胚胎する」とみる土谷は、「無学な私は「文弱」といふ言葉はいつの世から生れたのか知らないが、多分、彼の王朝文学頃からではあるまいか。万葉精神は決してさうでなかつた筈だ」と歴史を劃して、そう罵られかねない、あるいは、すでにそうした罵声を浴びたかもしれない「文弱」という蔑みを回避しようとする。彼なりに歴史をふりかえるなかで、「平安遷都後のあの、本来は一体であるべき文武の道がはだはだとなり、文が長袖者流の遊戯に墮した」ようすは「本当の意味の日本人の在り様では決してなかつた」との判定を示し、「筆を弄するなどといふ言葉も余り軽々しい」ともいう。ここでもまた「言霊」という語をもちだして、「謙譲の徳ならまだしも、言霊の幸はふ国柄を思へば、言挙げは止むに止まれぬ草莽の至誠の然らしむ処でなければならぬ」と断じる。

あらためて現状をとらえると、「思へば時局下、紙は益々貴重な戦力である。思想戦の武器である新聞雑誌の減頁に思ひを馳せば、藻汐草始め各園誌の休刊の如きは当然の措置であつて、吾々は挙げて戦力の増強を図らねばならぬ。全ては戦争一本、勝つ一本である」と、「武」ではなく「文」をもって戦う自分たちではあるが、物資不足ゆえに休刊とされた各園誌への処置に理解を示しながらも、「しかし、それだからと言つて、吾々が文学を^{ないがしろ}蔑にしてよい道理は成立たぬ」（ルビ原文）との断固とした姿勢をとってみせ、「風雅と戦意は同時に愈々高揚されねばならぬ」という——「成程、各園誌は従来、親愛なる病友の大切な文学の拠所であつたらう。否定はしない。とはいへ、これの休刊を吾々の文の中絶と合点しては早計である。有力な拠所ではあつたが、園誌はあくまで第二義的である。第一義の道はあくまでお互の胸に燃ゆる炎である筈だ」（傍点原文）と、「文」であれ「文学」であれそれを発信する媒体があることが重要なのではなく、「胸に燃ゆる炎」をこそ絶やさ

なければよいのだと力んだ。

その「炎」とはなにか？——それは、「戦ふ国民なら、いや日本人なら時局下胸の炎は鉄火の如く灼熱し、必勝街道である第一義の道を明るく清く直く皎皎と照出すだらう」と、自分（たち）の「胸に燃ゆる炎」を「文」や「文学」に即して述べることをしていない。「時局下」の「国民」あるいは「日本人」の理として説いているにすぎない。

つづけて、「少くともこゝに今後集ふ面々は至誠止み難き炎の所有者である。書くもの読むもの、お互ひこゝの自覚に立つて頑張り抜かう。日本人ではないか」と記して閉じられたこの稿は、「文弱」と排除されずに「文」において「戦」う決意表明であり、「日本人」として、「吾が肇国の伝統」にのっとり、「渾然たる一体」としてある「文武」のうちの「文」をいわば武器として「いのちの限り戦ひ抜く覚悟」を「神武の精神」なるものに拠って宣言したのだった（傍点原文）。

浅野繁 浅野繁はその執筆稿「団栗の叫び」の冒頭でよりいっそう直截に、「紙も戦力であり弾丸である」との隠喩を用いて時局を形容した。「さうした時に当り、その貴重な紙を貧しい自己の歌集についやして仕舞つたことはいたく恥ぢられてならぬ。唯、少しでもこの歌集が戦意を高揚し、兎角潤ひの褪せがちな現今の生活に多少の色彩を添へ得ることが出来れば是にすぐる欣びはない」という。

ここにいう「歌集」とはなにか——大島青松園在園者の信徒によるキリスト教霊交会（以下、霊交会、とする）の教会堂にはゆったりと広い図書室がある。その蔵書の 1 冊に、浅野繁を著者とする謄写版刷り非売品の『歌集 星霜』（藻汐短歌会）がある。その発行は 1944 年 11 月 10 日、『青松』第 1 号がつくられる 20 日まえのことだった。謄写版によってどれだけの部数が刷られたかはわからないものの、それが 1 部や 2 部であるはずがない。浅野には、自分の歌集を「戦力であり弾丸である」とまで喩えることはできなかったのだろう。せめて「戦意を高揚」できればと慎ましくも期待をみせるが、それよりも貴重な財の消費のほうを恥じている。ただしそのあとで、「産み出すことハ一朝一夕には出来ないが、産んだ作品の貧しさに寧苦しめられる。けれどもその中に僅かでハあるが愉しみと愛着がある」と、やはり作品をまとめあげたよろこびを隠し切れなかったようだ。

浅野はいう——「藻汐草が休刊された。何かもの足りない淋しさを感じるがわれわれハこれをもつて自己の道の中絶し、なげうつべきではない。寧心の火を更に拡大しなければならぬ」と意を決して、「甚厚顔しいが私ハ私なりに団栗ハ団栗なりにものした作品を左に記して諸賢の批評を仰ぎ度い」と自作の短歌を寄せた。浅野もさきの土谷におなじく、発信媒体の有無に拘泥することのないようにとうたえるときに、「火」の隠喩を用いた。浅野の短歌をあげよう。

空襲警報下氣息をひそめ守る夜の心耳にぞ沁む杳き潮鳴

ガダルカナルの樹海のそこに生き貫きて戦へりとぞいま尚兵は

大瀬戸は秋さににしか月夜空ま澄む機音の一機ならずを

戦機をぞふくみたる機か大瀬戸の月をかすめてとどろきにけり

たたかひの秘命をふくみ翔る機か耳かきたててこの月の夜を

さらにまた「神風特別攻撃隊頌」と題した6首があり、そこでは、

神機遂ひに至るただちを勝鬨の海波にひびく息もつがせず

あま天征くやすなはち死する必定を貫きたまふ神風特別攻撃隊は〔ルビ原文〕

「一機必中」とぞつぶやきつつも二十すら越えぬ若らのその心根を

若きらのいのちと遂げし戦果なり畏れはきびし頭をかき垂れて〔同前〕

基地発つや将還るなき益良夫の道ぞ究めつつ之は堪へなくに

悠久に生きるいのちをまつぶさに見せしたまふ神風特別攻撃隊は

などが歌われた。ときに短歌としての破綻をみせながらも、さきに自覚していると示した恥を雪ぐかのように、浅野は「神風特別攻撃隊」を誉め讃えた。

浅野は短歌についての自己の作法を説く——「所謂、戦争歌を作るために、報道記事を嘗め廻してあるやうな作歌態度の浅薄さは屢々指摘されてゐるが、落着いて作らうといふ風な反動的なもの多しのは嘆かましい」と避けるべき仕儀を指摘して、「戦ひは我等の夢床にも忘れ難く日常生活は一つに係つて戦ひにあるのだから短歌の如き生活感情の端的な表白を旨とする作品に専念する者は心を励まして戦ひを詠む外に自己を生かす道はない」と自己実現と創作活動とをつなげてみせていた。

彼はつづけて、「問題は只態度の如何、即ち感動の追求の深淺にある。銃後の心は前線の把握が出来ぬ。間接的で空々しくなる等と逃げる傾向が強いが、その困難を克服して、感動に深く斬り込む事によつて今、一つの切実な眞実世界の創造を果たすのが文学の悲願でハないか。短歌ハより純粹に自己に即する文学であるが、報道記事から強い衝動を受けた場合、それに肉薄して行つたならば必ずしも他をも感動させる深みを湛へたものが得られぬ事はあるまい」と論じ、「今、一つの切実な眞実世界の創造」という彼がとなえる「文学の悲願」、いいかえれば「文学」の作法を實踐することで、「銃後」にいながら「戦ひを詠む」ことをとおして「戦意を高揚」する徒となろうとしていたとみえる。

この土谷と浅野の稿は、見開きの右ページに前者が、左ページに後者が配されている。なぜそのような綴じ方になったのかの説明はない。図版の多い図録とみえる図書のページを台紙として使い、そこに貼られた浅野の稿は原稿用紙の裏に書かれている。それは「大島療養所」の名が入った用紙のようだ。

長田穂波 穂波生による「島庵独語」と題された稿は、「青山荘便りは大変によい——俺らもやらふではないか——話の結果つひに一役買つてしまった」と始まった。ここに記された「青山荘便り」がなにか、ひとまずはわからない。執筆者の姓名は、長田穂波という⁹⁾。「一役買」つたといったものの、「さて何を書くか？」とつづけた穂波は、「つらつら考へ、よくよく思つた末に表題の如く…事に触れ、ものに感じたまゝに…独り呟くやうなものに決定した。腹綿に風を通す事になるであらふ」との執筆方針を示した。

秋の日和か猫の目か、何が飛び出すやら計られない。矛盾もあり、間違も起らふ…読むで叱るとも感心すると御勝手と…致して置く他ない。つむじ曲りの^{〔マ マ〕}尠ない世の中だから。／空の雲のやうに顛れては消え又消えては現れる心の鏡にうつる其儘に正直に書くことにする。

との構えをあらわす穂波の書きようは、戦時という時局をまるで感じさせない飄々とした風である。

⁹⁾ 長田については、阿部安成『島で—ハンセン病療養所の百年』サンライズ出版、2015年、を参照。

ついで彼は、さきにふれた歌集についてのべる——「さて歌集『松籟』と『星霜』とが出版になった。これは嬉しひことである。勝ちぬく為めには、元より懸命でなくてはならぬが…花を作り歌を詠む…これぐらひの心のゆとりを持つぐらひでなくては駄目である」と時局をおもいうかべはしているが、ここではひとまず、戦時における文学とは、といった厳めしい難問を掲げはしていない。

さて、『松籟』とは、笠居誠一の編によって藻汐短歌会からやはり『星霜』とおなじく1944年11月10日に謄写版刷りでだされた歌集である。このとき大島では、1冊は個人の、1冊は同人による、2冊の歌集が刷られていたのだった。穂波はそれをよろこび、花をつくること歌を詠むことにあらわれる「心のゆとり」を持とうと勧めていた。ただしそれはただの推奨なのではなく、「心のゆとり」は、ひとが持たなくてはならない、ひとの生活には欠かすことができないとなえているのだ。なぜなら、それは戦時ゆえだからというかのようである——「時局々々と口では言ひながら…食ひ度いに捕はれて…××事件を耳に為る等、何のさまだ！／然し彼のみ責め度くない。それに近似した恥しい気持ちが……言ふまい言ふまい。だが斯る気持をこそ切りかえるべきだ」というも、「事件」とはなにか、どういった「さま」があらわれたのか、「彼」とはだれかがわからない。ここで穂波は、時局そのものよりも、それによってひとの心身がどうなるかを注視しているようにみえる。『『武士は食はねど高楊子』古い言だが戦国日本人の美しい品性を今更に学ぶべきである！』と、参照した過去や歴史を、自己を省みるきっかけとしているようだ。これは、自己を勢いづかせる支えとして過去と歴史を動員しようとした土谷とは、ずいぶんとようすが異なるとわたしはおもう。

もちろん穂波も戦争を知っている——「大空に機関銃の音がパッパッパッパとひびく…」とその耳で戦時を聞いたのだから。ただし、彼はその音を、「何を告げ、何を想はしむるか…汝ら癩者よ急迫した国家の秋だ『祈れ祈れ』『忍べ忍べ』と聞こえないか——何か不足、何が欲しい——不平を言へとは、ひびいて居ない。生命を捧げし人の声である」とうけとめ、「国家よりも余りに自己に捕えられてゐるやうで恥しい」との感慨を記した。

あれこれ記しながらも「とは言へ」とうけて、「俺らも忠君愛国の精神は決して人後にを

ちないぞ＝本当にだ＝たゞ思つてゐる事と実生活とが甘く行つてゐないだけである
呵々」と大笑いし、「理想は高し鼻ひくしか？」と落ちをつけたかのようだ。

そしてさきの「ゆとり」をくりかえし記す——「何と想つても花も作り歌集を出すぐら
ひの＝ゆとり＝を持つた『おちつきある心』で真面目に時局に対処いたしたい『勝ち
ぬく生活』は斯くて確立すると信じてゐる！」と、戦時においても迷つたり動揺したりす
ることなく、「ゆとり」や「おちつき」が大切だところにかけているというのである。そし
て末尾に「◎人の活くるはパンのみによらず神の言葉による＝＝＝何処からか『糞
たれ奴が』と叱つてゐる声とするやうに想はれる！」と記した穂波は、かならずしも不動
の信念を持ち得たのではないようでもある。

欄外に「昭和十九年十一月二十日記」と記された穂波の稿は、三日月ののぼる夜空のイ
ラストと「第 号室」という文字と罫目が謄写版で刷られた原稿用紙や罫紙など4枚を
使い、そのつぎには小さな紙片がついている。そこに記された、「諸君！！／大いにやしま
せう！この程度の原稿なら別に永続性を心配する事はないですね。／課題は沢山あるし一
時間もかゝれば出来上るし。／何のへノへノモヘエだ大いにやませう。面白くて益にな
るものが確にできる園内向け故にカタがこらない。／諸君の御努力を乞ふ／穂波生」とは、
病友同人への励ましだった。

すでに靈交会の機関紙を長年にわたって編集発行してきたり、園の総合誌にもしばしば
寄稿したりしていた穂波にしてみれば、「この程度の原稿」を書くことは苦にもならない容
易いことだったのである。

笠居誠一 笠居誠一「随筆」は、さきにふれた歌集『松籟』をまとめたのちの随想を記
した内容となる——「私は今回松籟を発行してこれで一度過去の歌を整理した事になるが
歌帳には二三千の歌がある」といい、「私は松籟を発行して事足れりとは思ふて居らない。
より良き物を生み出す為研究をつゞけたい」と精進と研鑽とに努めることを明示し、ま
た、「歌は己の姿を鏡に映し見る様な物」、「歌は人格の表現でもある」との一家言を明記し
た。

「十一月二十七日夜」と日付が記された笠居の稿は、原稿用紙の裏が使われている。そ

の表はというと 400 字詰の罫目のはいった用紙で、「笠居誠一用紙」と名の入った彼専用の原稿用紙だった。そこには、罫目をきちんと使って記されたペン書きの短歌十首がみえる。欄外などにはまた、「△」「○」「再」「40」と鉛筆で記されている。「字余り」や「(ふ)」などの追記があるので、これは下書きなのかもしれない。原稿用紙 1 枚に十首だと、さきの「二三千の歌」であれば原稿用紙 200～300 枚となる。さらにその何倍かの短歌を詠んでい

たとなると、自分専用の原稿用紙を拵えたくなるというものだろう。

十首を転記しよう。

丹念に死者の俗名は骨箱に書きつゝ想ふ己が終の日を

△ 菓包紙に書きある友の絶詠の寂々として迫る力や

南の洋に敵性艦隊を神軍艦行きてうちけり

○ 癩院に嫁ぎ娶りのいとなみを諾ふ程に身は老いにけり

○ うつくしき物と思ふに心寂し嫁ぎ娶れる人のいとなみ

初夜すぎし入江に近う漁する舟に愛しき女の声あり

○ 感 = [判読不能をあらわす。以下同。この字は月偏に旁が犬か大] 部隊長山本大尉
生ひ立ちし今岡の里海へだて見ゆ

再 松葉杖つきて枕辺を行く音強^{字余り}ふ病み衰へし頭にひゞきけり

脳神経おかされし児がうまうまと物欲る聞きつ思ひ寂しむ

○ 生命とりの病と思軒^(ふ)の下に留りて黒き血は見つゝゐて

転載 つぎの稿「日本の文章道」には「土谷記」と末尾にあり、「新若人十二月号保田与重郎」の転載ということである。土谷は、「文に神の御霊を招くと共に、すでに神に仕へるやうな文をなすのが日本の文章道である」という保田の言辞に深く感動したというところか。この稿は「日本標準規格 A4」と印刷された原稿用紙にペンで記されている。

祝辞 「昭和拾九年拾壹月／短歌／歌集松籟星霜を祝してほか」と記されたいわば扉のついた稿は、さきにふれた 2 冊の歌集への祝辞である。小宮山和夫は「松籟。星霜を祝して」と題して「笠居兄に」3 首を寄せ（「島に病む侘しき日に拓き得したふとき道に君を幸ふ」など）、「浅野兄に」も 3 首を献じた（「若き日を私に耐へて島に病む 繁が歌は熱き

句ひす」「病む身にも大御心のあまねかる さきはひにみて歌ひ止まざる」など)。

「松籟 星霜二歌集の出版を祝して」と題した綾井譲は、「辿り来しみちと思へば子を
 しみ母にも似たるやすけさに居む」ほか2首を、「松籟。星霜を祝して」と題した田根正夫
 は「捷ち勝たむ気魄は満つるこの時局を魂の叫びぞ世へ栄えなむか」ほか1首を、「霜月詠」
 の題のもとで斉木操は、「神鷲に続く」と「飛行雲ほのかに頭ちしかひくぐり攻撃離脱入
 りりみだれつつ(戦争訓練)」「標的機を遠く行き過ぎ反転に移れる機より射撃音きこゆ」
 など8首を、「神風譜」の題のもとで志真郁夫は、「一億の精気は凝りて撃敵の神風となる
 莊嚴の世や」「皇民の生命は化してアメリカを撃ちてし止まむ神風となる」ほか1首を、泉
 俊夫は「身過雑詠」と題して「出来得べきつとめ^{いそ}励しむ日日にして楽しかりけり癩は病み
 つも」「ひたぶるに島のなぞえに鋏を振る幻なら^{かな}可憐し畑を拓くと」「雨雲の光りを孕む朝
 の園庭^{にわ}落葉搔き=す^{ひび}盲の韻きつ」(ルビ原文)の3首を詠んだ。

さきにみた2冊の歌集『松籟』『星霜』へ祝辞は、小宮山和夫、綾井譲、田根正夫、斉木
 操、志真郁夫、泉俊夫による短歌となった。

喜田正秋 喜田正秋の俳句7句にも戦時が滲み——「無月なる峰をかすめて飛機征きぬ」

「おろがむや霧のなかなる飛機の空」、それとはまたべつに句を詠み——「金色の径一ト筋
 や月の海」「三日月や叢がり咲ける曼珠沙華」、島にはない情景も詠んだ——「秋天の極ま
 る果ての玉藻城」「川沿ひに上る径や曼珠沙華」。玉藻城は、生駒と松平の居城で高松市に
 ある。大島に、川はないはず。俳句は自己の視点を島の外へと連れだす手段でもあった。

土谷勉 土谷勉による「あとがき」は同誌創刊の経緯を伝え——「『廻覧雑誌でも作つて
 おいたら先でまとめるのに都合がよい』／と、園長先生が仰有つた。そのことを先日歌集
 「松籟」「星霜」の出版記念座談会の席上つたへたら、やらうではないか^{マ マ}」と皆がいきごん
 だ。私に具体的にはおしつけて任すので、第一号を編んだ。もつとげなものをと考へたが、
 忙しいので意にまかせなかつた。おいおいよいのが出来るだらう」と、今後への期待を寄
 せていた。

原稿用紙に記された「あとがき」は、2枚め以降は箇条書きとなっている。

○実際「藻汐草」の休刊は淋しいが、こんなにして見ると、又ちがった面白さがある。

私の考へでは一回毎編輯者が代つたらそれぞれの持味が出て一層面白いだらう。

○お役所の方は誰々に見ていたゞくか、いろいろ考へたが、結局、事務官殿のお手数を煩はし、適当の人に見て貰ふことにした。そして青山荘の林先生の御批評をいたゞいてから此方へお返し願つたらと思つてゐる。

○「青松」といふ題は、これも私に任されたから私の思ひのまゝつけた。平凡といふかも知れないが、「青松」を私が好きなので仕方がない。「いくさ」なんてのも考へたが、青松の気高さおごそか、爽やかさに比較できない。同人連中の御諒解を得たい。

——表紙にあった「林」「青山荘主人」は同一人で、医師の林文雄だった。「お役所」とはいまの在園者がいうところの「園側」のことで、べつにいえば療養所当局を指す。表紙に押印やサインのあった「野島」泰治園長も「高橋」竹代も林もみな医師である。そして、この号の編集を担った土谷が誌名の命名者であり、やはり『青松』は歌集『松籟』『星霜』の出版にかかわって、しかも、園長野島の発案だったこととなる。

土谷による「あとがき」は次号についても記す——「○第二号の原稿ゞ切は来月十日ときめたい。お役所のどなたか、何か寄せていたゞけないものかしら、もちろん病友の原稿ゞ切も十日である。そして第二号は編輯を浅野君にしてもらひたい希望である。原稿は私宛にでも浅野君宛にでも何方でもよい。願ひしたひ」。つづけて、「○園長先生や事務官殿がすくなくとも将来、吾々のことを園外に語られる際、この「青松」が何かの御参考になる域にまで高めたいものである。／○では一号を送り、二号をたのしみに待つていたゞきたい。／○第一号の原稿を請求したのは喜田正秋君だけであつた。ゞ切を卅日と勘ちがひしてゐたらしい」とのこと。末尾には、「昭和十九年十一月二十九日記、／土谷勉」の署名と押印がある。原稿の提出はほぼ順調だったようだ。

大島青松園では、医師と療養者との交流が確認できる。これは、休刊となった『藻汐草』の編集発行をめぐつてもそうだった。園長や事務官が「将来、吾々のことを園外に語られる際、この「青松」が何かの御参考になる域にまで高めたい」との抱負を明記したのだから、この誌は園内外の媒体となることを、しかもそれが「お役所」のひとの手によってなることを期待していたのだから、隔絶した狭く閉ざされた空間での「虚空への絶叫」「絶叫

する沈黙」と決めつけてしまうと、手づくりの『青松』を見誤ってしまうかもしれない。この稀物をどう読むかを、いま、制作者たちが、わたしたちに問うているのである。

林文雄 裏表紙見返しには、「青山荘主人」による「読后独語」と題された文章が、ちいさな字で記されている。「二十一日受領／二十二日返／二号も一緒に来た／少しおくれる」と題字のうえにある。題字したには、「最初の一行ハ母の書き散しなり娘への手紙のかきかけなり、母の手紙恋かる久しき人もあら人か、たどたどしくも親しき好の筆よし」とみえる。

ついで縦 1 行とおして「大へんおさむくなりましたが皆々様おさわり」とあったその左には、誌面を上下 2 段にわけ線が引かれ、その上段には、「○祝青松発刊！土谷氏編の第一輯面白くよむ。雑然たる綴込み反って藻汐草の几帳面よりわが性格にうれしく親し／○土谷兄の大文字敬服す／兄の社会の雑誌に出されるものハどんな種類のものか青松読むでその原稿なり印刷したもの見たきハ小生のみに非くべし／○長田兄ハ何をかいても長田兄独自のものが出来居る、余が牧師の書くもの＝あまり読まざるも兄のもの＝＝＝する所以也／○浅野兄の文章、笠居兄のものそれぞれ面白くよんだ、短歌でも俳句でもそれぞれ各人に各種あつてよいのでないか、一律に定むべきでないと思ふ、笠居、浅の共に真似し得ざる特色がある、虚偽さへなく心ひたぶるに自分の信ずる傾向を完成すべきである／○短歌小宮山兄のハいづれも立派、今度ハ兄の歌集が出る番か、良い歌人の多いのに驚く、齊木兄の四首目標的機は良い写生と思ふ、時局下の観念的な作品に良いものハ得〔判読不能〕忠実なり／○俳句の正秋兄のみとくに〔判読不能〕」。

上記の文章が記された罫紙の欄外にも、「○青松、土谷兄の傑作、甚だよし、場当りでなく創造＝な作品も次第に現れると思ふ」「土谷兄〔判読不能〕」と記されている。

罫紙を貼った台紙の余白には、「MERRY CHRISTMAS」「1932」と印字されたシールが貼られ、そのしたに、「コノシールハ 1932 年ニューオルレアンスに米国国立癩療院を訪ね人と立よりし際折しもクリスマスでホテルにうりありしもの」と手書きで記されている。

裏表紙にはなにかが剥がれた跡がある。

「文」の自立 さきにみたとおり、大島青松園の自治会はその五十年史において、手書

き手づくりの『青松』を、「敗戦色兆さず貧窮・荒涼下に、せめて惻隱の情感だけでも綴り止めておこう、とのひたむきな思いと、ひもじさに詩情のカケラでも置いて、耐えよう、との素朴な念願」がかたちになったもの、「戦後の「療園再建」の涙ぐましい情况等も活写されて」いるもの、ととらえてみせていた。戦時下に、そして戦後初期の療養所で廻し読みされていた手づくりの逐次刊行物は、「敗戦色兆さず貧窮・荒涼下」にあらわれた「惻隱の情感」や、「ひもじさ」に対置される「詩情」といったていどの代物だったのか。

むしろ、そこにいう「ひたむきな思い」や「空き腹ながらも、意気軒昂というか、若さと意欲が溢れていた」その勢いが、すでにその第 1 号に綴じられた稿にみたとおりに、戦時に生きる療養者を「ますらを」となすべく調達されて、療養者による「文」なるものに結晶しようとしていたのではないだろうか。

また、わたしたちは当然のこと、1945 年に戦争がどうなるのかを知っている。したがって、創刊の翌年に『青松』になにが記されることとなるのか、その年の夏を過ぎると『青松』はどうなってゆくのか、それらをつくった療養者たちは、いったい、なにものだったのか、が読みどころとなってゆく。